

1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県

こいけ【小池】

こいけ

以前は、小池部落のすぐ北側は馬場目川が流れていた。現在の上小池との間の道路よりもっと南、御前柳神社に付近まで川原だったと聞いている。ここは川岸で小さな池が点在していたため「小池」と呼ばれるようになった。

1998/9 小池 斎藤甚之助氏談

こいけ

「延久3年(1071年)戊10月3日藤原系図。紀国を立ち出羽国に越て秋田郡盛醫山(森山)之麓に館を造りて百姓に落入、俗た。斎藤與五衛門と号付しを小池と名づけ草分の百姓と相成り」という古文書があった。斎藤甚之助氏の先祖がここ小池の開村をしたという記録である。

1998/9 作者調査

こいけ〈五城目町・八郎潟町〉

馬場目川の下流右岸平野部に位置する。地名は当地区に存在した小さい池によるという。

〔中世〕小池村。戦国期から見える村名。出羽国秋田郡のうち。天正19年1月17日豊臣秀吉が秋田実季の当知行地を安堵した朱印状写に、「こ池むら」240石余とある。「慶長6年秋田家分限帳」にも栗沢弥五郎の代官所支配の村として「湖東通川崎村」270石余と記載(秋田家文書)。南北朝期の坂碑が中島に5基、萱戸かやどほ家に約40基も残存。山岳信仰の霊場として崇敬された森山・高岳両山の麓にあって宗教的景観を呈していたことがわかる。近世末期まで当村に存立した御前柳明神社は、湊合戦で戦死した三浦兵庫頭盛永の妻を葬った祠という(秋田風土記)。

〔近世〕小池村。江戸期～明治22年の村名。秋田郡のうち。秋田藩領。寛永3年戸村堰の完成により新田開発が進み、同5年から真崎長右衛門も指祇を得て当村開田を継承(町史)。「正保国絵図」

で小池新田村184石、「元禄七郡絵図」でも小池新田村221石余と図示。宝永年間以降は小池村。

「享保黒印高帳」で村高236石余・当高218石余(うち本田154・本田並39・新田25)、「寛政村附帳」で当高219石余(すべて給分)と認定。

「天保郷帳」は218石余。戸数は「享保郡邑記」で35軒、「秋田風土記」で40軒。東接の岡本・恋地村とたびたび併合・分離を繰り返し(秋田風土記など)、幕末には遂に当村分に併合。村鎮守は神明社。五十目村の五十目沢に草飼入会(五城目町史)。

明治7年小池学校開校。同11年南秋田郡の村として、戸長役場を一日市村に置く9か村と連合。同22年南秋田郡面潟村の大字となる。

〔近代〕小池。①明治22年～現在の八郎潟町の大字名。はじめ面潟村、昭和31年からは八郎潟町の大字となる。〈地誌編〉八郎潟町 ②昭和33年～現在の五城目町の大字名。八郎潟町小池の一部を五城目町に編入して成立。

〈地誌編〉八郎潟町 小池 〒018-16

〔成立〕昭和31年9月30日

〔直前〕面潟村大字小池

〔世帯〕69〔人口〕311

町の東部。農村地帯。東は五城目町に接する。町道夜叉袋-小池線が東西に貫通。萱戸には菅江真澄もスケッチした中世の板碑50余基がある。御前柳神社は安産の神として有名。他に日本機械秋田工場がある。

1980.3出版 角川日本地名大辞典 5 秋田県

こいけ-いたひぐん【小池板碑群】
小池萱戸屋

小池板碑群の由来

八郎潟町には石に梵字を刻んだ板碑いたびと呼ばれる石造遺物があります。現在まで71基確認されていますが、その内種子の確認できるのが52基あり、県内一の密集地となっています。

板碑は鎌倉時代から室町時代の初期にかけて、造立された遺墓や生前供養のための石塔婆です。